

共通テスト「情報Ⅰ」問題文中の専門用語(2)

— 2025年と2026年の比較 —

久野 靖

電気通信大学

共通テスト「情報Ⅰ」の1年目と2年目^{☆1}

大学入試センターの共通テストに「情報Ⅰ」が加わってから1年以上が経過し、1年目と2年目の問題セットを比較することが可能になった。特に「情報Ⅰ」の場合、1年目の平均点が69.26点に対し、2年目の平均点は56.59点と、13点近く下がっている。これは「難易度を調整した」からだろうか？具体的にどう「調整」したのだろうか？

別稿¹⁾において、「情報Ⅰ」2026年本試験問題における専門用語の出現を調べ、「情報Ⅰ」について一部から言われている「知識を問われない」「思考力・判断力や読解力重視であり受験勉強が報われない」などの指摘への反論を述べた。

本稿はその「続編」として、専門用語と正答率から見た2025年／2026年問題の違いの分析と、「情報Ⅰ」の望ましい出題は何かの検討を行う。

本稿でも別稿¹⁾と同様に、2025年試験問題文と2026年試験問題文²⁾(ともに本試験)から専門用語の抽出を行った。作業は、赤澤ら³⁾の研究をもとに本会情報入試委員会が作成した、情報科全教科書用語リスト⁴⁾(以下「用語リスト」)を参考に、これ以外でも情報の専門用語と判断したものは抽出した。

抽出した用語一覧の2026年ぶんは別稿¹⁾を参照されたい。2025年ぶんの一覧を表-1～表-2に示す。問題番号は、先頭の数字が大問番号で、番号のみの場合は大問冒頭の説明に現れた語を示す(第2問はA、Bに分かれるため、それぞれを大問と見なし2A、2Bとした)。大問中の小問の説明に書かれている語

は「1問2」「1問1a」等としている。

語が1つの大問で複数回出現する場合は初出のみを抽出したが、それぞれ問題テーマが異なる大問(第1問では小問)での同じ語の出現は別個に抽出した。具体的には「インターネット」(1問1a;1問1b)、「データ」(1問1b;4)、「Webサイト」(1問4;2A問4)、「情報」(2A;4問1)、「グラフ」(2B問2;4問1)があった。重複を除き抽出した語数は64、うち用語リストに現れない語は7であった。

表の3カラム目(見出しL)は別稿¹⁾で詳述するレベルを示す。0は「用語として出現するが、問題にかかわらない」、1は「用語を知っていて、記述内容がそれに相当する／しない等を判断できる」、2は「用語に対応する概念とその周辺の知識が統合され、関連が分かる」、3は「用語に対応する概念を理解し、自在に活用できる」に相当する。

4カラム目は用語リストの定義する総意率^{3), 4)}を示すが、これは「多くの教科書索引に現れていることを表わす尺度」であり、1.00ならすべての教科書索引に現れていることを意味する(逆にここが空欄なら用語リストになかった語である)。

総意率は教科書の世代ごとに定義されるが、本稿では基本的に「情報Ⅰ」世代を考える。2025年問題文では「情報Ⅰ」より前の教科書索引にのみあった語に「確率」「集計」「複製」が見られた。前2語の総意率は「社会と情報／情報の科学」世代のもので[*]、「複製」の総意率は「情報A/B/C」世代のもので[**]印を付した。

以下では2025年の大問ごとに含まれる用語について検討し、2026年と比較する。2025年と2026年の一覧から用語のレベルごとに個数をまとめたものを、表-3と表-4に示す。罫線で区切ったグループ

☆1 本稿の執筆にあたり、本会初等中等教育委員会、情報入試委員会の皆様との議論が有益であった。ここに感謝します。

表-1 2025 年問題文中の専門用語

問題番号	用語	L	総意率
1 問 1a	インターネット	0	0.85
1 問 1a	発信者	0	-
1 問 1a	デジタル署名	2	0.69
1 問 1a	複製	1	0.55**
1 問 1a	暗号化	1	0.92
1 問 1a	改ざん	1	0.47
1 問 1a	経路	1	0.10
1 問 1a	盗聴	1	0.33
1 問 1b	ビット	2	1.00
1 問 1b	IP アドレス	2	1.00
1 問 1b	有線 LAN	1	0.43
1 問 1b	無線 LAN	1	0.85
1 問 1b	データ	1	1.00
1 問 1b	インターネット	1	0.85
1 問 1b	ドメイン名	1	1.00
1 問 1b	HTML	1	0.92
1 問 2	セグメント	1	-
1 問 2	LED	1	0.29
1 問 2	エラーコード	1	-
1 問 3	チェックディジット	2	0.38
1 問 3	ユーザ ID	1	0.80
1 問 4	マウスカーソル	2	0.31
1 問 4	メニュー	2	0.27
1 問 4	アイコン	2	0.66
1 問 4	Web サイト	1	0.61
1 問 4	アプリケーション	1	0.83
1 問 4	ユーザインタフェース	1	0.66
1 問 4a	PC	0	0.18
1 問 4a	マウス	2	0.29
1 問 4a	ディスプレイ	2	0.29
1 問 4b	クリック	2	0.18
2A	情報	1	0.92
2A	属性	1	0.29
2A	会員 ID	2	-
2A	ポイントカード	2	0.14
2A	情報システム	2	0.92
2A	ネットショッピング	2	0.47
2A 問 4	アカウント	2	0.43
2A 問 4	ログイン	2	0.29
2A 問 4	(Web) サイト	2	0.61
2A 問 4	コード	2	-
2B	シミュレーション	2	1.00
2B	表計算ソフトウェア	2	0.70
2B	確率	2	0.24*
2B	乱数	2	0.77
2B 問 2	グラフ	1	0.57
2B 問 2	ケース	1	-
3 問 1	プログラム	3	1.00
3 問 2	配列	3	0.83
3 問 2	添字	3	0.61
3 問 2	要素	3	0.38
3 問 2	代入	3	0.54
3 問 2	変数	3	1.00
4	データ	1	1.00
4 問 1	情報	1	0.92
4 問 1	グラフ	1	0.57
4 問 1	尺度水準	2	0.61
4 問 1	棒グラフ	2	0.43
4 問 1	帯グラフ	2	0.18
4 問 1	比例尺度	2	0.81

表-2 2025 年問題文中の専門用語(つづき)

問題番号	用語	L	総意率
4 問 1	間隔尺度	2	0.89
4 問 1	順序尺度	2	0.89
4 問 1	名義尺度	2	0.89
4 問 2	集計	1	0.06*
4 問 2	散布図	2	0.83
4 問 2	相関係数	2	0.54
4 問 3	指標	1	-
4 問 4	箱ひげ図	2	0.61
4 問 4	外れ値	2	0.92

表-3 2025 年問題ごととレベル集計

問題番号	level0	level1	level2	level3
1 全体	3	18	10	0
問 1a	2	5	1	
問 1b		6	2	
問 2		3		
問 3		1	1	
問 4/4a	1	3	5	
問 4b			1	
2A 全体	0	2	8	0
2A		2	4	
問 4			4	
2B 全体	0	2	4	0
2B			4	
問 2		2		
3 全体	0	0	0	6
問 1				1
問 2				5
4 全体	0	5	11	0
4/ 問 1		3	7	
問 2		1	2	
問 3		1		
問 4			2	
合計	3	27	33	6

表-4 2026 年問題ごととレベル集計

問題番号	level0	level1	level2	level3
1 全体	2	7	20	2
問 1a	1		2	
問 1b	1		10	
問 2				2
問 3		2	3	
問 4/4a			5	
問 4b		5		
2A 全体	8	3	0	0
2A/ 問 1	7	3		
問 2	1			
2B 全体	0	6	1	3
2B		6		3
問 3			1	
3 全体	0	3	2	6
3			1	
問 2			1	5
問 3		3		1
4 全体	1	5	6	0
4/ 問 1	1	1		
問 1b		4	1	
問 3			2	
問 3b			1	
問 4			2	
合計	11	24	29	11



ごとに、1 行目が大問全体の数、2 行目以下がその「問題番号」ごとの内訳を示す^{☆2}。また表-5 に、2025 年と 2026 年の各問（解答欄ごと）の正答率と、大問ごとの平均正答率をまとめた^{☆3}。

第 1 問（小問群）と用語

第 1 問は小問群であり、紙面の量（9p/32p、問題冊子ページ数）に比べ用語数が多く（31/69）、「知識問題」的と言える（2026 年も同様）。

問 1a はデジタル署名の効果を問うもので、「インターネット」「発信者」「デジタル署名」「複製」「暗号化」「改ざん」「経路」「盗聴」の 8 語を抽出した。最初の 2 者は問題にかかわらないのでレベル 0、「デジタル署名」はほかの語との関連が分かる必要からレベル 2、

☆2 「2A/ 問 1」などは、全体説明と問の説明の語数をまとめて示している。
 ☆3 正答率は大学入試センターの問題評価・分析委員会報告書 <https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/hyouka/> にある。

表-5 2025 年／2026 年の正答率

問題	2025 年正答率	2026 年正答率
1	平均 0.65	平均 0.43
問 1a	0.54	0.29
問 1b	0.42	0.30
問 2	0.68/0.48	0.66/0.29
問 3	0.74/0.60	0.51/0.74
問 4a	0.78	0.50/0.33/0.10
問 4b	0.95	0.59
2A	平均 0.77	平均 0.71
問 1	0.96/0.96	0.94
問 2	0.98	0.37/0.60
問 3	0.55	0.85/0.88/0.62
問 4	0.74/0.66/0.53	
2B	平均 0.77	平均 0.53
問 1	0.93/0.82/0.56	0.79/0.85
問 2	0.74	0.30
問 3	0.77	0.57
問 4		0.45/0.33/0.42
3	平均 0.69	平均 0.56
問 1	0.97/0.95/0.92 /0.90/0.88	0.87/0.83/0.82
問 2	0.94/0.61/0.22	0.55/0.65/0.55/0.53
問 3	0.52/0.57/0.44 /0.39	0.42/0.52/0.39 /0.43/0.19
4	平均 0.64	平均 0.67
問 1a	0.29/0.82	0.56
問 1b		0.89/0.88
問 2	0.62	0.75/0.92
問 3a	0.22/0.73	0.60
問 3b		0.74/0.76/0.53
問 4	0.86/0.67/0.88 /0.69	0.27/0.51

大問 4 の問 1 と問 3 は、2026 年は a、b に分かれ、2025 年は分かれていないので、2025 年の数値は a の個所に記した。

後 5 者は問題の選択肢に表れるので内容を知っているべきレベル 1 と判断した。

問 1b は 128 ビットの IP アドレスが利用される理由を問うもので、「ビット」「IP アドレス」「有線 LAN」「無線 LAN」「データ」「インターネット」「ドメイン名」「HTML」の 8 語を抽出した。うち前 2 者は選択肢を考える鍵なのでレベル 2、後 6 者は問題の選択肢に表れるので一応知っているべきレベル 1 と判断した。

問 2 は 7 セグメント LED による表示の問題で、何通りの表示ができるかと、5,000 種のエラー表示に必要な LED は何個かを問うている。「セグメント」「LED」「エラーコード」の 3 語を抽出したが、どれも問題の本質ではなく、レベル 1 と判断した。

問 3 はチェックディジットに関するもので、特定の計算方法の結果と、2 つの計算方法の能力の違いを問うている。「チェックディジット」「ユーザ ID」の 2 語を抽出したが、前者はレベル 2、後者は問題の本質ではないのでレベル 1 と判断した。

問 4 はユーザインタフェースの Fitts の法則（この名称は問題文にはない）が題材である。まず法則の説明があり、問 4a で画面上の短時間でポイントできる対象、問 4b でメニュー上のマウスポインタから遠い項目の配置理由を問うている。

問 4 冒頭では「マウスカーソル」「メニュー」「アイコン」「Web サイト」「アプリケーション」「ユーザインタフェース」の 6 語を抽出したが、前 3 者は問題の重要概念なのでレベル 2、後 3 者は重要でない例示なのでレベル 1 とした。問 4a では「PC」「マウス」「ディスプレイ」を抽出したが、「PC」はレベル 0、ほかは重要概念なのでレベル 2 とした。

次に正答率および 2026 年との比較について述べる。2025 年の問 1a、問 1b は用語を中心とした問題で、正答率は 0.54 と 0.42 とやや難しくなっている。2026 年の問 1a、問 1b、問 4b も用語を中心とした問題だが、正答率は 0.29、0.30、0.59 と前 2 者ではだいぶ難しくなっている。

これは同じ用語を中心とした問題でも、問う内容の深さはさまざまであり得ることを表す。語のレ

ベルも 2025 年はレベル 1、2026 年はレベル 2 中心である。特に 2026 年問 1a の主記憶／補助記憶問題が、レベル 2 用語が 2 つだがその内容を深く聞く点が象徴的である。また 2026 年問 4b はレベル 1 の語しかない、やさしめの問題である。

2025 年の問 2、問 3、問 4 はそれぞれ、テーマを決めて説明し、それについて問う問題（読解／思考力問題）であるが、正答率は上記の用語問題より高い。専門用語は問 2 と問 3 が少なく、問 4 はレベル 2 の語が 6 つもあるが、用語の難しさが正答率を低くしていない。

特に問 4b の 0.95 という正答率の高さは印象的で、選択肢をその場で見て少し考えれば正解できたのかと想像する。

これに対し、2026 年の問 2、問 3、問 4a もテーマ方式だが、正答率は問 2 と問 4a の中では後の問ほどははっきりと難しくなっている。用語のレベルも 2 と 3 が中心となっているが、読解／思考力問題では、用語の難しさが問題の難しさに繋がるとは言えないように思う。

第 2 問（中間群）と用語

第 2 問は中間から成り、第 3、4 問がプログラミングとデータ分析に固定されている中、やや大きな多様なテーマの場となる（2026 年も同様）。

第 2 問 A は、紙面の量 6p/32p に対し用語の数 10/69 と、第 1 問の半分の比率で、用語が少ない。この問題は、スーパーマーケットの情報システムが題材で、冒頭で 1.5p（レシートの図を含む）を費やしてその働きを説明している。用語は「情報」「属性」「会員 ID」「ポイントカード」「情報システム」「ネットショッピング」を抽出している。前 2 者は単独の説明に出てくるのでレベル 1、後 4 者は問題中で互に関係するのでレベル 2 とした。

続く問 1 は時間帯ごと売り上げの集計データ、問 2 はポイント会員情報とレシートを組み合わせで得られる情報、問 3 は情報システム中で店コードとポイント会員 ID が流れる場所を問うもので、新たな用語はない。問 4 はショッピングサイトとこの

情報システムが連携した場合のメリットを問うもので、用語として「アカウント」「ログイン」「サイト（用語リストでは Web サイト）」「コード」を抽出したが、これらも関係を考えるレベル 2 とした。

第 2 問 B は、紙面の量 4p/32p に対し用語の数 6/69 と、やはり第 1 問より抽出した用語が少ない。この問題は、お釣りを必要とする集金で、お釣りの用意額をシミュレーションで決めるものである。冒頭 1p にその説明があり、そこで「シミュレーション」「表計算ソフトウェア」「確率」「乱数」を抽出している。これらは関係を理解しておきたいのでレベル 2 とした。

続いて問 1 はあるシミュレーション結果表の空欄とお釣りの量を問うているが、新たな用語はない。問 2 は 10,000 回のシミュレーション結果のグラフから読み取れることを問うもので、「グラフ」「ケース」を抽出しているが、これらは重要ではないと考えレベル 1 とした。問 3 は特定の条件下では起こらないケースを問うもので、新たな用語はない。

2025 年の第 2 問 A は、問 1 と問 2 が非常にやさしい。また第 2 問 B も、やさしい問題が多い。一方 2026 年の方は、第 2 問 A はやさしめだが、第 2 問 B では、問 1 を除いて難しい問題が多めである。

正答率が 0.9 超の問題は「誰もが正答」に近く、その数が多い 2025 年問題は弁別性の面からは弱かったと思われる。もちろん、「情報 I」新設 1 年目の出題なので、全体平均点 69.26 という許容範囲で高めの点数であったのはよかったが、2026 年問題の形の方が将来的には望ましいと考える。

用語については、2026 年の問題ではレベル 0 と 1 のものが多かったのに対し、2025 年はレベル 2 が多い（2026 年の and/or/not がビット操作に熟達している必要からレベル 3 としたのは例外的）。

そうして見ると中間は読解／思考力問題なので、2026 年のように用語はレベル 1 でも、内容的には深い問題を出すことができると言える。2025 年のようにレベル 2 の用語が並んで、さあどのような問題が、と思ったら肩透かし的にやさしい問題、と感じた人が受験者にいたかどうか、いたらよろしくないかは



意見の分かれるところかもしれない。

第3問（プログラミング）と用語

第3問はプログラミングがテーマの大問である。2025年の第3問は、紙面6p/32pに対し用語の数6/69と、圧倒的に用語の比率が小さい。用語も問1で「プログラム」、問2で「配列」「添字」「要素」「代入」「変数」とプログラムの基本語彙で、すべてレベル3とした。用語がこれだけなので、テーマの説明には専門用語はないことになる。

問題は、工芸部の合宿におけるスケジューリングがテーマとなっている。問1は手で表に記入する形でスケジューリングを行うときの空欄を問う。問2と問3でスケジューリングを行うプログラムを作成していく。問2は中核部分で、配列を初期化する値、工芸品の割り当てに進む条件式、ループの実行回数を問う。問3はコード全体について、ループ変数の名前、上限値、出力時の計算、所要日数の加算式を問うている。

第3問の正答率は、問1がすべて高く、問2も初期化値の問（プログラムの動作を理解せずに答えられる）が高い。反面、ループ回数の間は全大問中最低であった（第4問にも同点の間）。一方2026年の第3問は、やはり手で解く問1がやさしいが、2025年ほどではない。実行回数を問う最後の問の正答率0.19は、2025年のループ回数の間0.22とほぼ同じなので、受験者層は両年で変わっていないと思える。

用語については、2026年は待ち行列がテーマなので、それに関する用語がある点が異なる。しかし両年の違いは、手で解く部分（どちらも問1）のやさしさが違ったことで、前述のように正答率が0.9超の問題多数は新設1年目ならではであろう。

第4問（データ分析）と用語

第4問はデータ分析がテーマの大問である。2025年の第4問は、紙面8p/32pに対し用語の数

16/69と、用語の比率が小さい。用語は冒頭で「データ」、問1で「情報」「グラフ」「尺度水準」「棒グラフ」「帯グラフ」「比例尺度」「間隔尺度」「順序尺度」「名義尺度」を抽出しているが、「データ」「情報」「グラフ」は問題に深くかかわらないのでレベル1、それ以降は重要なのでレベル2とした。問2では「集計」「散布図」「相関係数」、問3では「指標」「箱ひげ図」「外れ値」を抽出しているが、いずれも問1と同じ理由で最初の語はレベル1、ほか2つはレベル2とした。

問題は、旅行者の行動データの分析がテーマとなっている。問1前半は尺度水準の選択問題、問1後半は棒グラフと帯グラフから読み取れることの選択問題、問2は散布図と相関係数から読み取れることの選択問題、問3は複数の要因間間の関係についてのグラフ対象の選択問題である。問4は問3で出たグラフの一方に箱ひげ図を組み合わせたもので、指定した点の数をマークする問と、条件やグラフ上のどの点かを選択する問である。

第4問の正答率は、問3の前半が低く（第3問のループ回数の間と同じ）、続いて問1前半が低いが、あとは普通ないし高めである。問1前半は尺度水準の用語選択問題なので、尺度水準の理解が不十分な人が多かったと思える。問3前半はほかの間と同様の読解／思考力問題で、難易度が高かったものであろう。

一方2026年の第4問は、問1aと問1b前半が用語選択、あとが読解／思考力問題という構成で、問4前半が難易度が高かった。

全体に第4問は両年とも似た構成で、平均正答率も近い。用語は2025年がレベル2の語が多いが、これは問1の尺度水準の選択肢問題の影響で、それを除くとやはり両年で同じ傾向である。

望まれる「情報Ⅰ」の試験問題とは

最後に全体としての両年の比較と、「情報Ⅰ」の試験問題として何が望まれるかを検討する。

第1に両年のテストで言われるのは、平均点の違いであろう（2025年の69.26点に対し、2026年の

56.59 点)。共通テストの他科目を見ると、両年とも 40 点台後半～ 60 点台前半の平均点が大部分であり、「情報 I」は 2026 年の方がそれに近い。

先にも書いたが、正答率が 0.9 以上の問題は「誰もが正答」に近い。2025 年問題ではそのような問題は 10/42 問あり、配点の総計は 20/100 点であったが、2026 年問題では 2/46 問、5/100 点であった。2025 年と 2026 年の平均点の差の多くはこのためである。このような問題が多数あると、その問題を解いている時間は「できる人に良い点数をつける」という試験本来の目的とは違うことになってしまう。その意味で、2026 年の方が望ましい。

第 2 に両年の違いが目立つのは、第 1 問の小問群の正答率が大幅に違うことで、2025 年が 0.65 (平均点では 13.09/20 点) に対し、2026 年では 0.43 (平均点では 8.10/20 点) と、約 5 点の違いがある。

用語面ではだいたい同数を抽出している。両年とも用語選択問題である問 1b、問 4b は、前者は 2025 年がレベル 1 の語が中心なのに対し 2026 年はレベル 2 の語が中心、後者は 2025 年は用語が 1 つに対し 2026 年は 5 つとなっている。正答率は問 1b が 0.42 対 0.30、問 4b が 0.95 対 0.59 と、2026 年が低い。これらは、用語の様子が難易度の差に繋がっている例と考えられる—(A)。

一方、用語面からは 2025 年が難しそうな問 1a、問 4a でも、正答率を見ると 2026 年が難しい。これは問 1a にあっては、主記憶装置と補助記憶装置の 3 つの違いという、多くの教科書で必ずしも明確には書かれていない事項が問題になっていること、問 4a にあっては、エラーのあるメールアドレスの振舞いという、教科書には直接説明されていない事項が問題になっているためであろう。

教科書にないことの出題に反発もあるかもしれないが、主記憶／補助記憶やメールアドレスの扱われ方まで含めて系統的に考えれば分かる問題である。このような「深い」「教員の話や探究学習を通じて身につく」知識の問題を交えることが「情報 I」の試験としてあるべき姿だと考える—(B)。

(A)、(B) 2 点を合わせると、2026 年問題は難易度を調整はしているが、より良い作問の方向を目指した結果そう思ったのではと思わせる。

第 3 に、これは 2026 年問題単独での知見だが¹⁾、第 3、4 問や 2B のように、読解／思考力を見る問題でも、用語の知識、システムの思考、特定の知識の深い活用を求める設問があった。このような問題により、読解／思考力と知識の力をともに見ることが可能であるし望ましいと思える。

第 4 に、両年とも第 3 問のプログラミング部分(問 2、3)は現在の受験者に合った難易度だが、プログラミングをきちんと学んだ層にはやさしすぎる。次期学習指導要領では、プログラミングの基本は中学校で学ぶよう変わる方向だが、それに合わせ将来の共通テストでは、プログラミングをきちんと学んだ層に合った難易度としてほしい。

まだ共通テストに「情報 I」が新設されてから 1 年半ほどで、実施されデータの得られた問題セットは 2 セットであるが(ほかに追試験・再試験問題が同数あるがデータは公開されていない)、さまざまなことが明らかになっている。今後とも、関係各位による良い試験への努力を期待しつつ、我々「外野」もできることは応援していきたい。

参考文献

- 1) 久野 靖：共通テスト「情報 I」問題文中の専門用語—2026 年本試験から—、情報処理、Vol.67, No.9 (Sep. 2026)。
- 2) 大学入試センター：2026 年／2025 年大学入学共通テスト情報 I 問題文(2026)、<https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/kakomondai/>
- 3) 赤澤紀子、赤池英夫、柴田雄登、角田博保、中山泰一：情報科教科書に現れる用語の変遷—情報 ABC から情報 I・II まで—、情報処理学会論文誌教育とコンピュータ、Vol.10, No.1, pp.13-24 (2024)。
- 4) 情報処理学会情報入試委員会：情報科全教科書用語リスト (2024)、https://www.ipsj.or.jp/topics/20240412_word.html
(2026 年 4 月 21 日受付)



久野 靖 (正会員) skuno@acm.org

1984 年東京工業大学理工学研究科情報科学専攻単位取得退学。同大助手、筑波大学講師、助教授、教授、電気通信大学情報理工学研究科教授を経て、同大特命教授、筑波大学名誉教授。理学博士。プログラミング言語、プログラミング教育、情報教育に関心を持つ。

